

2023年8月6日（日）「極度の貧しさがあふれ出て」

Ⅱコリント8:1-6

1 兄弟たち、マケドニア州の諸教会に与えられた神の恵みについて知らせましょう。2 彼らは苦しみによる激しい試練を受けていたのに、その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなったということです。3 わたしは証しますが、彼らは力に依じて、また力以上に、自分から進んで、4 聖なる者たちを助けるための慈善の業と奉仕に参加させてほしいと、しきりにわたしたちに願い出たのでした。5 また、わたしたちの期待以上に、彼らはまず主に、次いで、神の御心にそってわたしたちにも自分自身を献げたので、6 わたしたちはテストに、この慈善の業をあなたがたの間で始めたからには、やり遂げるようにと勧めました。

### 【序論】

久しぶりにビサイドチャーチ東京に来させていただいて説教のご奉仕にあずかれることを感謝いたします。コロナ前にはコンスタントに講壇交換を実施できておりましたが、2020年からお互いの行き来が難しくなり、今後どうしていこうかと考えていたところ、「禍転じて福となす」、安海先生のご提案により「リモート合同礼拝」というスタイルが採れるようになりました。更に、去年は相手方の教会に信徒さんが出席することで交わりが一步前進し、今年は牧師と信徒さんが一緒に相手教会に行くという発展形となりました。こういうことをやっている教会は全国を見渡しても珍しいかもしれません。単立教会同士が主にあって協力し合えるのは幸いなことだと感じております。この講壇交換は教会史の中でどのような意味を持つのだろうか、大きなことを考えておりました。時代や地域によって教会間の交わり方は異なりますが、21世紀の日本、それも時代の転換点において私たちが考えるべきことを、初代教会の交わりを学ぶところから見出していけるのではないかと。今日のために祈る中で心に示されてきたのが、Ⅱコリント8章の御言葉でした。

### 【本論】

#### 本論1. エルサレム教会の状況

まず、この箇所背景にある事柄の理解に努めたいと思います。パウロの宣教活動の一つの重要な側面として、困窮しているエルサレム教会を経済的に支援しようというビジョンがありました。エルサレムはユダヤ教の総本山でありますから、そこに立てられた教会の信徒たちは、キリスト教を異端視するユダヤ教徒による激しい迫害に直面していました。おそらく村八分のような状態となり、収入源あるいは供給源を失い、貧しい中で生きていかなくてはならなかったのでしょう。どれほどの困窮ぶりだったのかは想像するほかありませんが、共同生活によってどうにかその日をしのぎ、お金がなくなれば個人の資産を売って得た

資金を分配していたようです(使徒 4:32-37)。これは初代教会の美しい姿ではありますが、いつまでも続けられるやり方ではありません。いつか底を尽きる日が来るでしょう。その「底を尽きる日」がやってきていたのかもしれませんが。本当にお金がなくて困っていた。

そこでパウロは異邦人教会に呼びかけて、エルサレム教会への募金を集め始めました。この活動には彼の深い信念があり、異邦人キリスト者に対するユダヤ人キリスト者の偏見や差別を取り除くという目的がありました。ユダヤ教の伝統を拭い去れない所謂「ユダヤ主義者」たちは、異邦人も割礼を受けなくては救われないと主張していましたし、長い歴史の中で植え付けられた「両者は一緒に食事をしない」という距離感が未だに「隔ての壁」となっていたのです。食事を共にしないとは、「両者の間に平和がない」ということを暗に意味しています。そのことを象徴しているのがガラテヤ書に記録されている出来事ですが、エルサレム教会からガラテヤ教会を訪問した人々が異邦人との交わりを避けたという悲しい歴史が刻まれていました(ガラテヤ 2:11-14)。この両者の間を取り持つ役割を果たすのが異邦人キリスト者による「愛のささげもの」である、パウロの中にはそのような確信があったのです。そして、異邦人教会の一つであるコリント教会に対してもこのことを勧めていくのですが、どうも以前にテトスの指導によってこの募金活動は始められていたものの、何らかの問題が生じて頓挫してしまっていたようなのです(6節)。そこで、パウロはマケドニアの諸教会の良い前例を示してコリント教会を励まします。

## 本論 2. マケドニア教会の施し

**兄弟たち、マケドニア州の諸教会に与えられた神の恵みについて知らせましょう。(8:1)**

マケドニア州にはネアポリス、フィリピ、アポロニア、テサロニケ、ベレアといった町々が連なり、パウロは第二次伝道旅行のときにこの地方を通り、少なくともフィリピ、テサロニケ、ベレアでは教会開拓を行なったと思われます(使徒 16-17章)。これらの教会は、開拓当初から激しい迫害と困難に晒されたようで、そのことを証言している箇所もあります。

- ・ **きょうだいたち、あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会に倣う者となりました。彼らがユダヤ人たちから受けたのと同じ苦しみを、あなたがたもまた同胞から受けたからです。(Iテサロニケ 2:14)**
- ・ **どんなことがあっても、敵対者たちにひるんだりはしないのだと。このことは、彼らには滅びのしるし、あなたがたには救いのしるしです。これは神によることです。(フィリピ 1:28)**

このように、異邦人の町においてもユダヤ人による執拗な嫌がらせと迫害があったことが分かります。しかし、この地域の教会は苦しみの中にあっても拘らず、エルサレム教会への募金活動に進んで参加したというのです。

**彼らは苦しみによる激しい試練を受けていたのに、その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなったということです。(8:2)**

さて、今日は意図があって新共同訳を朗読用に用いさせていただいたのですが、それには理由があります。この箇所を新改訳第三版で読むと「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、

彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となった」となっており、聖書協会共同訳で読むと「彼らは苦しみゆえの激しい試練を受けていたのに、喜びに満ち溢れ、極度の貧しさにもかかわらず、溢れるばかりに豊かな真心を示した」となっていることが分かります。「極度の貧しさ」をどこに入れるかに違いがあるのですが、新共同訳では「満ち満ちた喜び」と「極度の貧しさ」がセットになって「あふれ出て」とされているのです。原文を素直に読むとそのようなになっていることが分かります。この訳は大変興味深い。喜びが溢れ出て人に施すようになるというのは理解できるけれど、貧しさが溢れ出て人に施す豊かさになるというのは不思議といえますか、不可解とも取れる事柄ではないか。人はふつう、貧しさの中にあると自分のことしか考えられなくなるものです。貰うことや、どうやって収入を得ようかというところにばかり思いが行きやすくなる。とても他人のことまで考える心の余裕はない、そうなりがちです。ところが、聖書は「貧しさ」をダイナミックに超えていく人間のスピリットがあることを教えています。マケドニアの諸教会の人々は、確かに手元に十分なお金があったわけではなかった。しかし、その少ない中から更に取り分けてエルサレム教会のために用いていく、そういう心が与えられていたのです。何が彼らをそのように突き動かしていたのか。それは主イエス・キリストの愛に捉えられていたからです。彼らは主が自分のために何をしてくださったのかをよく理解していました。福音を知っていたのです。主イエスが私のために命を捨ててください、罪の赦しという最大のギフトを与えてくださった。神の子としてくださった。その約束は永遠に変わることがない。地上の生涯の中でとてつもない宝を手に入れたのです。その喜びに満ち溢れていたため、彼らはもはや自分の持ち物にすら執着しなくなっていた。惜しみなく与えてくださった主に、惜しみなくささげよう。自分たちだけではない、貧しさの中にある兄弟姉妹のために、できることを一つでもしていこうではないか。彼らはエルサレム教会の信徒さんたちと会ったことはなかったかもしれませんが、まだ見ぬ人々のために喜んで行動していったのです。

私自身も同じような経験を何度もしたことがあります。私の学生生活を長きに亘って支えてくださっていた方々がおられました。娘の手術のためにと、海外から一度も会ったこともない方が献金を送ってくださったこともあります。キリストの愛が生きて働くとき、このような奇跡が起きるのです。世界中のキリスト教会は、このようにして立て上げられてきたのではないのでしょうか。

**わたしは証しますが、彼らは力に応じて、また力以上に、自分から進んで、聖なる者たちを助けるための慈善の業と奉仕に参加させてほしいと、しきりにわたしたちに願い出たのです。また、わたしたちの期待以上に、彼らはまず主に、次いで、神の御心にそってわたしたちにも自分自身を献げたので、(8:3-5)**

ここでのパウロのことばを読む限りにおいて、彼がマケドニアの諸教会に対して積極的に献金をお願いしたのではないことが分かります。パウロは彼らがどんなに困難な状況下に置かれているかをよく知っていたから、とても無理をさせることはできなかったのでしょう。ところが、パウロの思いとは裏腹に、マケドニアの信徒たちの方がこぞって献金を申し

出てきて、パウロが想像もしなかったことが起きたというのです。ここに主の大いなる御業を見たのでした。マケドニアの信徒たちがどういう姿勢でこの献金をしていたかが、5節の中でふさわしい順序で記されています。「**彼らはまず主に、次いで、神の御心にそってわたしたちにも自分自身を献げた**」とあるように、彼らの思いは第一に救い主イエスに向けられていた。そして、主を愛するのと同様に隣人を愛することへと思いを向けたのです。

### 本論 3. これからの時代に向けて

さて、今日私の心にこの箇所が示されたのは、これから到来する困難な時代を生きていくキリスト者の心のあり方を共に考えたいと思っていました。現在の日本の状況を見ると、30年に亘って進行してきたデフレと円安、度重なる消費増税、社会保険料の値上げ、インボイス制度の導入……と、経済が衰退の一途を辿っていることに不安を覚えておられる方も多いのではないのでしょうか。加えて、政府はとてつもないお金を海外にばらまいています。それだけではなく、10月から電気、ガス、上下水道、ガソリンといったインフラ関連の料金も大幅値上げとなると発表されていて、我が家にも先日通知が届きました。食料品の値段も段階的に吊り上がってきており、更に、日銀による長期金利の上限を事実上1%に引き上げるといふ発表もあり、住宅ローンなどへの影響も懸念されます。まさに、生きていくだけでも大変な時代がやって来ようとしています。そのような現実の中で、私たちは主を信じ、教会生活を続けているわけですが、私は一教会だけではなし得ないことが複数教会でできるのではないかと感じています。これからの時代にあって重要ではないかと考えていることをいくつか挙げさせていただきます。

#### ① 御言葉による養いの共有

この講壇交換の機会は、ふだん御言葉の奉仕に携わっている者にとって（少なくとも私にとっては）、霊的な養いを受ける貴重な機会となっています。数ヶ月前、私は久々の皮膚炎によって地獄の日々を過ごしておりましたが、そのときに安海先生が「メッセージの代打に行きますよ」と言ってくださったのに大変励まされました。今後もいつ体調を崩すか分からない「土の器」ですから、お頼りすることがあるかもしれません。反対に、波多先生や安海先生がお困りのときに私の方で何かお役に立てることがあれば、相談していただきたいと思います。牧師に力が与えられると、その教会の信徒の皆様にとっての力にもなるでしょう。

#### ② 「地の管理者」として生産力を身に付ける

インフレによってお金というものの価値が下がり続ける今、私たちに必要なのは、様々な意味で生産力を付けていくことではないか。特に、国策によって農業が著しく衰退し海外への依存度が年々増し加わっている今、有事の際にも安定した生活を営めるように備えておきたい。将来的なことを考えていくとき、キリスト教会が「地の管理者」として日本の農業を支えていけるようになることが重要ではないでしょうか。

### ③ 献金だけでなく、物質的なもの、知識や技術の供与

私たちはこれまで「お金がなければ何もできない」ような社会で生きてきたかもしれません。働き人を献金によって支えることはこれからも重要ですが、それだけではなく、これからは物質的なものの交換、知識や技術の供与によって人をサポートすることがより必要になってくるのではないかと。経済的に厳しい中であっても、私たちの持てるものを工夫して用いていくときに、お金以上の価値がそこにあることが分かり、これからの時代を乗り越えていく道が見えてくるかもしれません。

#### 【結論】

あれこれ提案させていただきましたが、これらすべての中核に「マケドニアの信徒たちのスピリット」、「その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなった」という驚くべき真理を据えたいと思います。彼らを突き動かしていたものは「恵み」であって、主イエスから受けたものを隣人とも分かち合っていきたいという願いによるものでした。人は如何なる状況下にあっても、人に心から仕えていくとき、真の人間らしさ、神に造られた人間としての本来の姿を輝かせていくことができるのです。主イエスの地上の生涯は、家もなく、妻もなく、収入もなく、心も体力も人に与え尽くし、最後は十字架でのちをささげ、神に対してご自身を焼き尽くしたものでした。この方のうちに真の人間としての尊厳があった。私たちもその豊かな生き方実現していくことができるのです。どんなに小さな奉仕であっても、喜びをもって、まず主にささげ、次いで、神の御心にそって隣人にも自分自身を与えるものでありたいと思います。

#### 【祈り】

教会の主よ、このように教会間の交わりが与えられていることを感謝いたします。主イエスによって始められた福音宣教の働きは、常に兄弟姉妹の愛によって前進してきました。信者たちは、その時代ごとに考え、自分たちが持てる精一杯のものをもって、神と人に仕えてきました。この21世紀を生きる私たちにも豊かな知恵と力を与えてくださり、どんなに高い山も乗り越えていくことができるようお助けください。両教会を祝福し、群れに連なる一人びとりの生活を支えていてくださるようお願いいたします。

#### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人と人が心を合わせるところに、一人にまさる力を加え給う、父なる神の愛、あらゆる時代の聖徒に、困難を乗り越える知恵を与え給う、主イエス・キリストの恵み、各々が持てるものを最大限に生かし、神と人にとに仕えさせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。